

所員自著紹介

1. 書名：『イチロー君，大学で何を体験した？』
2. 著者：石黒敏明
3. 出版社：リトル・ガリヴァー社
4. 出版年月：2011年，2月25日
5. ページ数：186ページ

教員暦39年目（神奈川大学26年目と前任校13年）を迎え、大学で体験した過去のイベントを振り返り、その記述と感想を書きあげた日記的、紀行文的な著書です。イチロー君という架空の友人に、私が語りかける形式を取りながら、著書の前半は、1) 私が担当した大学・大学院での講義や演習、2) 学部・学科の行事（学部40周年記念国際シンポジウムやシンガポール日本企業訪問、さらにフェスタや文化ウィーク等）、3) 大学の国際交流イベント（アストン大学派遣語学研修、カリフォルニア大学デービス校派遣語学研修等）、4) 大学院19年間における修士論文や博士論文の指導を回顧しながら、その要約と評価を記載しました。そこで、イチロー君に、それらの行事を通して大学で何を体験したかを問うている著書です。私の体験だけでなく、できるだけ学生側からの体験記述や感想も含めることにより、インタラクティブな形式を目指しました。著書の後半では、教育一般に関するエッセイ（「言語習得とギター・レッスン」や「松葉杖との独り言」等）を収録し、さらに、前著書『米国留学紀行』には描かれていなかった「英語をいかに習得するか」というテーマに、臨界期説に触れながら挑戦しています。第一に、好きな分野でどっぷり英語に漬かる、すなわち理解できる英語のインプットを大いに受信する積極性！ また不完全な語学力であろうとも、その英語を駆使し内容のあるアウトプットを発信する勇気！ さらに、何度挫折してもやり直す忍耐！と言語習得の究極的三大原則を提案しています。最後は、イチロー君に、遠藤周作氏の「諦めない愛」を伝えたく、結婚などのトピックで、宗教的香りのするメッセージを新入生や

卒業生に送る形式を取りながら、私の思想・信念を述べてみました。

『近代中国・教科書と日本』

並木頼寿・大里浩秋・砂山幸雄 編

研文出版10年8月刊

本書は、清末・民国期の中国の学校教科書をめぐる諸問題に関する論文と資料を集めた、日本で最初の研究書である。本書の核となった研究プロジェクト「戦前期日中間における教科書問題の研究」の企画が構想されたのは2001年の暮れのこと、その年の4月、「新しい歴史教科書を作る会」が編集した中学社会歴史分野の教科書が文部科学省の検定に合格したことに対し中国や韓国から厳しい抗議の声が寄せられた一方で、それを「内政干渉」とする日本国内の反発や憤りも従前になく高まった時期であった。その時日本の一部のマスメディアは中韓の「反日」世論を、それぞれの歴史教科書の偏向と関わらせて問題化しようとした。中国に関して言えば、それはその後「愛国主義教育」批判として発展していくことになった。中国の近現代史を研究する者として日中間の歴史認識をめぐる今日の対立をどのように考えるか。これにはさまざまな答えがありうるであろう。ただ、本プロジェクトに最初に参加したメンバーが一樣に感じたのは、この時期の歴史教科書をめぐる日中双方の議論は、戦前期にすでに同種の問題が発生していたという事実を完全に忘却したまま展開されており、そのためこの問題の歴史的性をとらえ損なっているのではないかという思いであった。

日中戦争へと突き進む過程で中国側に日本商品ボイコットなどの「排日活動」の取り締まりを求め続けた日本は、やがて「排日教科書」や「排日教育」の禁止も要求して中国ナショナリズムとの全面衝突へと至るのである。満洲事変当時の日本人には、「支那の排日教育・教科書」は新聞報道

などを通じて目にする日常的な話題であったと思われる。しかし、戦前期の「支那排日教科書」の存在は、戦後長い間日本人の記憶から消失してしまったように、ほとんど取り上げられることはなかった。しかし、私たちが戦前期の中国教科書を共同研究の対象として取りあげようとした理由は、「教科書問題」の歴史的、政治的意義を認めただけではない。何より学校教科書という近代教育制度にとって不可欠の装置について、これまでその重要性にふさわしい関心が向けられてこなかったことを痛感したからである。

本書の各論文は、内容に従って3部に分け、さらに巻末に今後の研究のための情報提供の意味を込めて2篇の資料を付した。第1部「教科書という装置」は、「清末民国期における教科書—教育制度と教科書制度・教科書の制度」「近代中国の小中学校における歴史教育概観」「清末民国期国文・国語教科書の構想」「南京国民政府と教科書審定—教育部編審処と国立編訳館の会議記録を中心に」、第2部「教科書と近代思想」は、「連続と断絶—20世紀初期中国の歴史教科書における黄帝叙述」「清末民国期における中国原始社会像—中国の近代史学と歴史教科書」「清末・民国期地理教科書の空間表象—領土・疆域・国恥」「清末民国期地理教科書の日本像」「清末の修身教科書と日本」、第3部「教科書の政治学」は、「『支那排日教科書』批判の系譜」「日中外交懸案としての教科書問題—1910～40年代」「植民地朝鮮における教科書事件」「1936、37年華僑学校教科書取り締まり事件」の各論文、資料編は、「教科書の発刊状況—清末から民国22年まで」「『日華学報』にみる「親日政権」下の教科書検定の動き」と題する資料を収録している。

なお、本書には大里の他、孫安石が論文を載せている。この自著紹介は、本書の総論（砂山幸雄氏執筆）を引用しながら、大里が1部書き加えたものであることをお断りする。多くの方に読んでいただきたいと願っている。

（大里浩秋）

1. 書名：*La Fête selon Mallarmé – République, catholicisme et simulacre*
（『マラルメによる祝祭—共和国，カトリック，虚像』）
2. 著者：熊谷謙介
3. 出版社：L'Harmattan（ラルマタン社）
4. 出版年月：2009年1月
5. ページ数：508頁
- 6.

パリ＝ソルボンヌ大学に2006年に提出した博士論文を元にしたマラルメ論。演劇、ワーグナーの楽劇、日曜コンサート、カトリックのミサ、新聞と書物、都市空間、文学サークル、葬儀……、こうした多種多様な「祝祭」こそ、「孤高の詩人」マラルメが生涯をかけて取り組んだ問題だった。彼が演劇批評や社会時評で打ち明けていた「祝祭」のヴィジョンを、ルソーやフランス革命に始まる政治儀礼と関係づけつつ、従来のフランス文学研究においてしばしば看過されてきた諸領域（芸術、政治、宗教、哲学、経済、都市論…）を横断することを目指した。

詩人が生きたフランス世紀末は、あらゆる領域で基盤を欠いた時代であった。政治においては共和政、宗教においては非宗教性、そして詩においては自由詩が支配的な時代であった。このような「危機的な」時代を終え、新しい「有機的な」時代の開始を告げようと、マラルメは政治儀礼やカトリックの儀式のメカニズムを解析する。演劇の美学とミサの美学の狭間で、普通選挙による人為的な国民の創生と、カリスマ的人物による群衆の熱狂の狭間で、マラルメが提示したのは「虚像」の詩学であった。それは詩という実体のないものの象徴的な力によって、民衆を公共の広場に召集する詩学であった。マラルメが世紀末に夢見た祝祭が、全体主義国家の巨大な祭儀や今日のスペクタクル社会までも照らし出す光となること——、これが本書の結論であり願いである。

（熊谷謙介）

ジェイコブ・J・アコル著、クリスティーヌ・ア
ブク画、小馬徹翻訳
『ライオンの咆哮のとどろく夜の炉辺で — 南ス
ーダン、ディンカの昔話』
青娥書房、四六判、2010年6月
ページ数、192頁

本書の物語は、今も世界から半ば隔絶された、中央アフリカの最も奥深い土地からもたらされた。聖なる槍を求めて手負いのライオン人間に挑む若者の疾風怒濤の戦い、獲物の心をザラザラと嘗め取るハイエナの言行の底知れぬ怖さ、善悪を超越して屹立する人食いの「漁槍の長」の力と神秘。それらが読み手を圧倒し、心を奪い去る。類話が脳裏に浮かぶ話でも、固有の奇妙な味わいが強く後を引く。物語りを始めるお決まりの惹句の目的は、物語の中に居座る悪夢が聞き手に及ぶのを防ぎ、話を妨害する者にはその悪夢が振り掛かるぞと警告することだ。悪夢が居座っている物語はとても怖い。だが、それこそが聞かずにはいられない物語である。物語に託された二律背反は、等しく誰にとっても人生の究極の真実なのだから。

南スーダンは、エヴァンズ＝ブリチャードのザンデヤヌエルの研究を生み、英国社会人類学確立の主舞台となった土地である。今もアフリカニストの心を最も強く魅了し続けるのは、彼の弟子G. リンハートの民族誌 *Divinity and Experience : The Religion of the Dinka* (1961) がなし遂げた、ディンカの人々が生きて日々経験する神々の神性 (divinity) の実に濃密で奥深い記述だろう。同書は難解だが、一般の読書子にもアフリカの世界の豊さの片鱗を伝えたいと願ってきた私には、アコルの手になる本書との出会いは運命的にさえ思えた。

本書の平明な文体と独特のリズム感を損なわずに訳出するには、私の日本語はいかにも拙く、不十分だっただろう。しかし、アコルの原稿に魅せられたアブクが精根を込めて描いた幾葉もの見事な挿絵が、その欠点を十分に補ってくれるに違いない。恐ろしく、そしてとても美しい本だ。

(小馬 徹)

田上 繁 (編) 『肥前 渋江諸家 文書目録』
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所、A4版、
2010年3月
ページ数、516頁

本書は、本学歴史民族資料学研究所 (歴民) と本学日本常民文化研究所 (常民) を横断する小さな研究会が2000年から取り組んできた、「河童水神信仰の宗家」肥前渋江家の文書群の目録化の成果である。肥前渋江家については、既にいずれも本書と同様に大部な『渋江公昭家 文書目録』(一～三)を出している。本書は、このシリーズの第四巻に相当し、かつその完結を画する記念的な巻でもある。

ところで、歴として編者 (田上) がいるのに、私が本書を「自著」として紹介する事情を先ず簡潔に説明しなければなるまい。実は、渋江諸家の文書群は、前任校時代に当たる1980年代から私が長年各地に探し求めた結果、漸く奇跡的に「発見」した史料群である。アフリカ研究を専門とする人類学徒である私は、日本史研究として十分耐え得る同文書群の目録化の実現のために、日本近世史の専門家である (歴史常民の同僚) 田上繁に協力を依頼し、院生教育も兼ねて研究会を組織した。以来、田上繁が目録刊行の編集に責任をもち、研究推進の屋台骨となってくれた。一方私は、研究代表者として、各文書の解説に携ると共に全4巻の全ての巻頭に長文の解説を書き記している。

河童に関する文献資料は、大きく近世後半、特に文化文政期 (19世紀初頭) に偏っており、しかも同工異曲のたった一葉か数葉程度のものがほとんどだ。ところが、渋江家の河童水神信仰の始まりはこの時期を数世紀遡り、残された文書も (中世期のものは乏しいが) 膨大な点数を数える。柳田国男が知ろうと稀求してついに知り得ず、折口信夫が夢想だにしなかった河童信仰の淵源としての渋江水神に関する文書を、大量の影印 (つまり写真版) とその翻刻 (即ち、活字化したテキスト) を添えて誰もが利用できるようにしたのは画期的だ。本書の刊行を機に、河童信仰研究は、全面的に見直されるであろう。

(小馬 徹)

桑野隆・長與進編著，小林潔他著
『ロシア・中欧・バルカン世界のことばと文化』
成文堂 2010年6月10日
ページ数 338頁

早稲田大学国際言語文化研究所による「世界のことばと文化シリーズ」の第7巻で，畑恵子・山崎眞次編著，加藤薫・新木秀和他著『ラテンアメリカ世界のことばと文化』（2009年7月）に続くものである。

『ロシア・中欧・バルカン世界のことばと文化』という地域名の挙げ方は熟していないものかもしれない。このタイトルはソ連崩壊後の当該地域の体制転換を踏まえてあえて採用された。本書の記述対象はスラヴ圏を中心として他にルーマニア，ハンガリー，カレリアを含み，執筆者は16名である。5部構成全16編の記事のテーマは総論である序章を皮切りに言語，歴史，地理，文学，芸術，学術とさまざまで，各部の題目だけでもその多様性がうかがえる。すなわち，I. スラヴ語世界への誘い（4編），II. バルカン地域における言語文化の諸相（2編），III. ロシア・中欧世界の芸術と文化（3編），IV. 国家の展開と言語の変容（3編），V. 「辺境」における言語文化の形成（3編），である。各国の基礎情報も「資料」として付せられ，使い勝手の良いものとなっている。

小林は第1部第2章に「スラヴの文字と文化——グラゴル文字とキリル文字の来歴が示すもの——」（38-56頁）を掲載，スラヴの2つの文字の由来と文字改革の経緯，文字と文化・宗教・歴史との関わりを論じた。

（小林 潔）

寺崎英樹，エンリケ・コントレーラス（共著）
『デイリーコンサイス西和・和西辞典』
三省堂，2010年5月刊
ページ数 1335ページ

ポケット判のデイリーコンサイス・シリーズの1冊で，実務，学習など多様な目的に応えるため実用性と十分な語彙を提供することを目標として編纂した。西和の部はクラウン西和辞典の語彙リ

ストが基礎になっているが，時事用語，科学技術用語などの新語や中南米の語彙を増強し，現代では使用がまれな語彙や成句は整理し，できるだけ現代化を図った。西和の部は見出し・成句7万7千項目，和西の部は見出し・用例2万5千項目を収録した。編者は上記2名であるが，他に編修委員6名が執筆に参加しており，その中の1名は本学の菊田和佳子准教授である。

（寺崎英樹）